

滿蒙叢書第二卷 解題

文學博士 內藤 虎次郎

口北三廳志

已に前卷に出す。

北征錄

北征後錄

明の金幼孜撰す。幼孜本名は善字を以て行はる。江西新淦の人。明の建文二年の進士にして、戸科給事中を授けられしが、成祖位を奪ふの後、翰林院檢討より累進して禮部尙書を以て武英殿大學士を兼ねるに至り、宣德六年、年六十四を以て卒し、諡を文靖と賜ふ。

幼孜は永樂の時に當り胡廣、楊榮等と共に、成祖の信任するところとなり、内閣に直し、考滿するも改任せず。成祖が薨祖、瓦剌等を親征せし時は、皆隨行を命ぜられ、

過ぐるところの山川要害を記述し、又銘を刻する時、撰文を命ぜられしことあり。幼孜は、よく鞍に據りて草を起し、立ところに成りしを以て、成祖甚だ之を重じたり。嘗て胡廣、楊榮及び金純等と道を失ひて谷中に陥り、夜に入りて幼孜は馬より墜ち、僅かに榮の救ふところとなり、翌日始めて行在に達したることありしが、成祖は十數人を遣して二人を搜索せしめ、たれども獲ること能はず、その歸り來りし時、喜び顔色に動けりと云へり。

北征錄は、即ち成祖の韃靼親征に扈從せし時の記錄にして、之より先き、成祖は、永樂七年に於て、征虜大將軍丘福をして、韃靼を征伐せしめしが、敗北して、五將軍共に沒せしを以て、意を親征に決し、八年二月に於て、詔を發して北征し、飲馬河より幹難河に及び、大に本雅失里可汗を破り、歸路に於て再び知院阿魯台を破りて、凱旋せり。幼孜は日を逐うてその行程を記し、併せて山川風土を審かにしたるが、但成祖が幼孜を留めて清遠侯王友等の營中に居らしめ、親ら精騎を率ゐて本雅失里を窮追せし間の記事は、その親しく見ざるところなるを以て之を缺けるのみ。その記述は極めて正確にして、明史本紀並に明實錄の記事に合し、其の足らざる處を補ふに足り、武備志、殊域周咨錄、全遼略記等の記事の誤謬を正すべし。但だ其

の地名の多數は、皆此行新たに命せし漢名にして、今の何の地に當るやは、之を確指するに難く、口北三廳志山川に譯語を引きて、此書と同一地名を載せ、今名を附したるも、其の正確を保し難し。

北征後錄は、成祖が瓦剌の答里巴、馬哈木、太平、把禿孛羅を征伐せし時の紀行にして、永樂十二年三月より八月に至り、その日を逐うて行程を記すこと、前錄の例の如く、凡前錄の審かにせし所は、皆省に従ひしを以て、その記述は前錄よりも簡略なり。唯この征伐は土刺河附近に及び、前錄の詳かにせざるところを詳かにせしものあり。その記事は、亦悉く明史本紀及び明實錄と合して、その正確を證すべきものたり。書中忽蘭忽失溫の地名を急蘭忽失溫に作るが如きは、傳刻の誤に係れり。其餘漢名の地の考へ難きは、亦前錄に同じ。

之を總ぶるに、幼孜の前後二錄は、成祖の兩次北征の記事として、又明初に於ける蒙古地方の山川風土の記錄として、明實錄と長短互に補ふを以て、重要な史料となすべきものなり。四庫全書提要に稱して、其往返大綱は均しく史傳と相合し、其瑣語雜事は史の錄せざる所のものなりと云へるは、その當を得たるものにして、その之を存目中に入れて、全書に著錄せざりしは、清朝學者の習として、務めて

明人の著述を抑ふるの風あるが爲めのみ、その記事の價值なきによるに非ざるなり。

北征記

明の楊榮撰す。楊榮字は勉仁、福建建安の人、建文二年の進士、翰林院編修を授かり、成祖位を奪ふの後入つて内閣に直し、工部尙書兼謹身殿大學士に歴官し、仁宗、宣宗、英宗に歴仕して正統五年卒す。年七十、文敏と諡す。榮は始め金幼孜、胡廣等と成祖の知遇をうけ、職に文學に備はり、成祖が五度塞を出でて北征するや、榮は皆之に隨行し、宣德以後楊士奇、楊溥等と共に先朝の遺老を以て輔弼の任に當り、年壽又高くして、天下の重望を負ふこと數十年、世に明代の賢相を稱する者、必ず三楊を首とするに至れり。

この書は、榮が永樂二十二年、成祖に隨ひて阿魯台を討伐せし時の紀行にして、この役は、軍に成功なく、成祖はその歸途に於て、榆木川に崩じたり。當時榮は金幼孜と共に中官等と議して、親しく後事を處理せるを以て、その記述は盡く自から略聞せる所に係るべく、明實錄の記するところと亦全く符合せり。但この書の記す